

ガイ語の正書法改訂案

中 川 裕

1. はじめに

私は1992年以来、ボツワナ共和国の狩猟採集民の言語であるガイ語とガナ語（コイサン諸語コエ語族）の言語学的な調査を進めてきた。その成果の一部として、音韻的に対立する分節音および声調の主要な部分はすべて解明されたであろうとの見通しをもち、中川（1994）で音声構造・音韻構造および文法構造の初期報告を、続いてNakagawa（1996a）では、クリック伴音に関するより詳しい記述を行った。さらに、Nakagawa（1996b）では、音韻的に対立するすべての子音と母音および2モーラ語の声調メロディーと1モーラ語の声調とを記述し、それらを表記することのできる"orthography"「正書法」を提案した（pp.121-122）。ところが、次節で述べるように、この正書法を公表したのちに、その改訂を考えるべき複数の理由が生じた。

本稿では、この1996年版正書法の改訂版である新しい表記の方法を提案する。その際、1996年に用いた"orthography"（正書法）という呼び方に代えて、「表記法」（transcription）という呼び名を採用する。それは、「正書法」という用語が、ある言語集団や政治集団が取り決める規範的つづり方を意味することが多いのに対して、ここで導入するのは、音韻的妥当性をもつ、ガイ語の語句やテキストの文書化をするための「表記法」で、当面は主に研究者の間で用いられることが予想されるからである。もちろん、将来的にガイ語話者が利用する正書法を制定するさいには、直接的にせよ間接的にせよ、この表記法が高い利用価値をもつのは間違いない。以下では、1996年版正書法を「旧正書法」と、本稿で提案する表記法を「新表記法」と略称する。

2. ガイ語表記法改訂案

ガイ語の新表記法を導入するにあたり、まず、改訂の理由を掲げ、ついで、旧正書法からの変更点を、クリック子音、非クリック子音、母音、声調の順に述べてゆこう。

2.1. 改訂理由

現時点で表記法の改訂をおこなう主要な理由は次の5点である。

- (1) 「旧正書法」提案の3年後、国際音声協会の国際音声字母の最新の手引書が（*Handbook of the International Phonetic Association*）刊行され、クリックのIPA枠組みでの表記方法が、はじめて具体例を用いて示された（IPA 1999: 20-21）。
- (2) 旧正書法の提案の時点以降、声調の解釈に関する私自身の調査が大幅に進展した。その結

果、新たなより正しい音韻解釈 (Nakagawa: forthcoming (b)) が、声調の表記方法にも影響を与えるに至った。とりわけ目立つ改訂は、2 モーラ語の声調メロディーを、単一の声調単位と解釈せず、H (high), M (mid), L (low) から選ばれる、2つの声調の連続と解釈することにある。

(3) 1996年以降に行なったグイ方言広域調査の結果、ボツワナ共和国クエネング・ディストリクトに分布するクーテ方言に、新たなクリック伴音 (つまり前声門音化鼻音伴音 [ʔŋ̃, ʔŋ̃ʔ, ʔŋ̃ʔ, ʔŋ̃ʔ]) が発見され (Nakagawa: forthcoming (a)), それを表記する方法が必要になった。

(4) クリック以外の子音のうち、旧正書法で、"gy", "z", "y" と表記していた音は、なるべく IPA 用法に一致させるほうが、記号選択の恣意性を避けることができるし、またその音価を伝えるのに便利だろうと結論した。

(5) 旧正書法では、母音の一部を聴覚印象の反映する音声学的表示で記していた。しかしながら、音韻論的な表示をするほうが、形態音韻論的な交替を体系的に理解することが容易になるし、またおなじ言語共同体に混在する方言的な言語変種であるガナ語との対応関係も表現しやすい、と考えるに至った。

2.2. クリック子音表記の変更点

グイ語には多数 (カデ方言とトメロ方言で 52 種類、クーテ方言で 56 種類) のクリック子音が認められ、これらをすべて区別するためには、複雑な合わせ文字を使用せざるを得ない。このような事情があるため、表記の変更も、クリック子音のそれが、他の音のそれに比べて複雑になっている。表 1 は、グイ語のクリック子音を、14 種類のクリック伴音 (click accompaniment) 別に、IPA と旧正書法と新表記法とで表記し、3つの表記法の対比をしたものである。

この表が示すとおり、6, 13, 14 番を除くすべての表記法に変更点がある (ここで用いる「後方閉鎖」「クリック伴音」の定義については、中川 (1998) を参照)。個々の変更点は以下の通りである。

第 1 に、クリックの後方閉鎖を表す記号 ŋ, g, k, ɠ, q を、クリック流入音を表す記号 |, ɰ, !, || の直前 (旧正書法では直後) に表記することを原則とした。これは、新しい IPA の流儀に従ったものである。ただし、後方閉鎖の特定に議論の余地がある 6, 12, 13 番は、それを表記しない。

第 2 に、1 番の後方閉鎖の表記は、旧正書法のように n から、IPA に従う ŋ に変更する。もしも、印刷上の都合で ŋ が使えない場合は、n で代用し、その表記法は n|, nɰ, n!, n|| としても良いことにする。

第 3 に、7 番の後方閉鎖の表記は旧正書法の q に代えて k を採用する。7 番のクリック伴音は、音声的には口蓋垂を調音位置とする破擦的放出音であるが、これとおなじタイプのクリック伴

表 1. クリック子音表記法の対照表

新表記法の欄で () 内に記されているものは、印刷上の都合で特殊な記号が使えない場合の、便宜的な代用表記法である。

	IPA	旧正書法	新表記
1	$\overline{\eta}, \overline{\eta^\dagger}, \overline{\eta^!}, \overline{\eta\ }$	n, †n, !n, n	η , η†, η!, η (n , n†, n!, n)
2	$\overline{g}, \overline{g^\dagger}, \overline{g^!}, \overline{g\ }$	g, †g, !g, g	g , g†, g!, g
3	$\overline{k}, \overline{k^\dagger}, \overline{k^!}, \overline{k\ }$	k, †k, !k, k	k , k†, k!, k
4	$\overline{k^h}, \overline{k^\dagger h}, \overline{k^! h}, \overline{k\ h}$	kh, †kh, !kh, kh	k h, k†h, k!h, k h
5	$\overline{k'}, \overline{k'^\dagger}, \overline{k'^!}, \overline{k'\ }$	k', †k', !k', k'	k' , k'†, k'!, k' '
6	$\overline{k x}, \overline{k^\dagger x}, \overline{k^! x}, \overline{k\ x}$	x, †x, !x, x	x, †x, !x, x
7	$\overline{k x'}, \overline{k^\dagger x'}, \overline{k^! x'}, \overline{k\ x'}$	qx', †qx', !qx', qx'	k x', k†x', k!x', k x'
8	$\overline{g}, \overline{g^\dagger}, \overline{g^!}, \overline{g\ }$	g, †g, !g, g	g , g†, g!, g
9	$\overline{q}, \overline{q^\dagger}, \overline{q^!}, \overline{q\ }$	q, †q, !q, q	q , q†, q!, q
10	$\overline{q^h}, \overline{q^\dagger h}, \overline{q^! h}, \overline{q\ h}$	qh, †qh, !qh, qh	q h, q†h, q!h, q h
11	$\overline{q'}, \overline{q'^\dagger}, \overline{q'^!}, \overline{q'\ }$	q', †q', !q', q'	q' , q'†, q'!, q' '
12	$\overline{\eta h}, \overline{\eta^\dagger h}, \overline{\eta^! h}, \overline{\eta\ h}$	nh, †nh, !nh, nh	h, †h, !h, h
13	$k ?, k^\dagger?, k^!?, k\ ?$?, †?, !?, ?	?, †?, !?, ? (', †', !', ')
14	$?η , ?η^\dagger, ?η^!, ?η\ $	未発見	?η , ?η†, ?η!, ?η (?n , ?n†, ?n!, ?n) (?η , ?η†, ?η!, ?η) (?n , ?n†, ?n!, ?n)

音が他のコイサン諸語でも認められ、コイサン言語学にはこの伴音を kx' を用いて表記する伝統がある。他のコイサン諸語との通言語的比較の便宜も考慮し、新表記法ではこの伝統に従うことにした。また、そもそも口蓋垂の破擦的放出音を IPA で表すには、旧正書法の qx' ではなく、 qx' とするのが正確である。旧正書法では字種の便宜を考えて、 qx' という妥協的な綴りを提案したが、コイサン言語学においては、このつづりは読者にやや奇異な印象を与えるものだったと思われる。

第 4 に、1 番についてすでに述べた、印刷の都合で η が使えない場合の n による代用は、14 番にも適用される。また、おなじ原則で、声門破裂音の記号 $ʔ$ を、アポストロフィー $'$ で代用することも便宜的に認めることにする。これは、13, 14 番に適用される。ただし、やむを得ずこれらの代用表記を用いる際は、その由をただし書きするのが望ましい。(特に、5 番と 13 番が混乱しないように注意しなければならない。)

2.3. 非クリック子音表記の変更点

非クリック子音の表記については、旧正書法からの変更点は少なく、表2にあげた3点だけである。

表2. 非クリック子音の表記の変更

カッコ () 内に記したのは、印刷上の都合で記号が使えない場合の代用表記法。

	IPA	旧正書法	新表記法
1	ɟ	gy	ɟ (dj)
2	j	y	j
3	dz	z	dz

まず、1番の有声硬口蓋破裂音の表記法に関して言うと、旧正書法では、田中(1971)以来、グイ・ガナの人類学的研究の文脈でもちいられてきた、"gy"という慣用的な表記法を採用したが、新表記法ではIPAのɟに変更した。gyという慣用的表記法は、聴覚印象的に日本語のガ行拗音(ギャ、ギユ、ギョ)の頭子音に類似して聞こえるグイ語の有声硬口蓋破裂音を表すものとして、グイ・ガナを研究する日本人研究者の間では受け入れられやすいものであった。しかしながら、この音の歴史的な起源が有声歯茎破裂音dであった(Nakagawa 1998)という事実と、その事実がコエ語族の音韻史にとって重要であるということから考えると、gという記号の選択は恣意的である。(聴覚印象からはずれるかもしれないが、dを用いた合わせ文字のほうがむしろ望ましい。)ただし、IPAのɟは、印刷をする場合に、利用できないことが比較的多いかもしれない(すでに印刷上の不便についてふれたŋとʔよりもさらにさらに使われることが少ないと思われる)。そのような場合には、代用表記として、djを用いることを提案する。

残る2番と3番には大きな問題はない。2番はIPAの用法に従うようにする変更であり、3番は、破擦音を、綴り上の簡素化という目的で摩擦音で表記していた旧正書法を、本来の破擦音の表記にする変更である。

2.4. 母音表記の変更点

母音の表記の変更は、表3に示す4点である。

表3. 母音の表記の変更

	IPA	旧正書法	新表記法
1	ĩ~ẽ	ē	ĩ
2	ũ~õ	ō	ũ
3	ua, oa, wa (in CVN)	oa	o
4	o ^s ~oa ^s	oa	o

まず、4つの変更点のうち1番と2番は、同じ原則による改訂であり、鼻母音音素 /ĩ/ と /ü/ に関わる。これらの鼻母音音素は、音声的には口母音音素の /i/ と /u/ に比べて、より広い（低い）母音として発音される。旧正書法ではその音声特徴を優先し、ë と ö で表記した。しかしながら、複合動詞の形成における形態音韻論的な交替を観察すると、これらの母音は /e, o/ ではなく、/i, u/ と同じ振るまいをすることが確認できる。したがって、語形変化の規則性を表記にも反映させるためには、1番と2番の変更が必要になる。

3番にあげた変更点は、/m, n/ で終わる閉音節の2モーラ語における母音、つまり CVN の V 位置に現れる母音に関わる（C は子音、V は母音、N は /m, n/）。グイ語では、この位置に現れる円唇母音は2重母音化し、[ua], [oa], [wa] とでも書くべき発音になる。複合動詞形成の際に、語幹が CVNV に形を変えると、この母音は [u] と発音される。また、ガナ語では、同種の2重母音化はないので、この母音は [u] と発音される。近縁のコエ語族の言語（ナロ語やナマ語）でも、このような2重母音化は見られない。新表記法では、グイ語に特異な2重母音化された発音の表記ではなく、音素的な表示を行うことにする。

4番目の変更点は、咽頭化円唇母音の表記に関わる。咽頭化円唇母音 /ɔ/ は、音声的には2重母音化される傾向があり、旧正書法では、2重母音として表記していた。しかしながら、この表記には聴覚印象に近いという以外には利点がなく、語の音節構造に関する誤解も生みかねないので、新表記法では音素表記をもちいることにする。なお、咽頭化を表す記号は、これまで通り、母音の下に波線（ティルデ tilde）を付けて表す。

2.5. 声調表記の変更点

声調表記は、2モーラ語の扱いに体系的な変更がある。表4は旧正書法と新正書法の声調表記のちがいを対照したものである。前者では、2モーラ語に現れる6種類の声調メロディーを、ひとつの音韻的な単位をして扱う解釈にもとづくのに対し、後者では、その6種類の声調メロディーを2つの声調の連続として扱い表記する。したがって、新表記法では、それぞれのモーラの上に声調記号を記す。

表4. 声調の表記の変更（2モーラ語）

2モーラ語の4種類の音節構造 CV:, CVV, CVCV, CVN を表記法的に表すために、それぞれ、便宜的に taa, tae, tare, tan を使っている。

旧正書法				新表記法			
taa	tae	tara	tan	táá	táé	tárá	táí
táa	táe	tára	tán	tāá	tāé	tārā	tāñ
tâa	tâe	târa	tân	tâá	tâé	târâ	tâñ
tāa	tāe	tāra	tān	tāā	tāē	tārā	tāñ
tàa	tàe	tàra	tàn	tàá	tàé	tàrà	tàñ
tāa	tāe	tāra	tān	tāā	tāē	tārā	tāñ

なお、第2母音に鼻音の補助記号が付く場合、それと同時に声調記号をつけることが困難な場合がある。その際には、声調記号を鼻音補助記号の右横にならべて記すことを勧める。

例 táà の代用として táã

5. 声調の表記の変更 (1 モーラ要素)

	旧正書法	新表記法
high tone	ta	tá
low tone	tà	tà

1モーラ要素 (1モーラ語, 1モーラ形態素, あるいは3モーラ語の第3モーラ要素) の声調の変更点は単純である。表5に示すとおり, 旧正書法では表記しなかった高声調を明示的に表記するという変更だけである。

参考文献

- 田中二郎 (1971) 『ブッシュマン』 思索社。
- 中川 裕 (1994) 「ガイ語調査初期報告」『アジア・アフリカ文法研究 22 (1993)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 55-92 頁。
- Nakagawa, H. (1996(a)) A first report on the click accompaniments of |Gui. *Journal of the International Phonetic Association*, 26: 41-54.
- Nakagawa, H. (1996(b)) An outline of |Gui phonology. *African Study Monograph, Supplementary Issue*, 22: 101-124, 1996.
- Nakagawa, H. (1998) Unnatural palatalization in |Gui and ||Gana? In Mathias Schladt ed. *Language, identity, and conceptualization among the Khoisan: Quellen zur Khoisan-Forschung 15*, Cologne: Rudiger Koppe, pp.245-263.
- 中川 裕 (1998) 「コイサン諸語のクリック子音の記述的枠組み」『音声研究』2(3): 52-62.
- Nakagawa, H. (forthcoming(a)) The phonology of ||Gana Group languages. In Rainer Vossen ed. *The Khoesan Languages*. London: Curzon Press.
- Nakagawa, H. (forthcoming(b)) The tonology of ||Gana Group languages. In Rainer Vossen ed. *The Khoesan Languages*. London: Curzon Press.
- The International Phonetic Association (IPA) (1999) *Handbook of the International Phonetic Association—A Guide to the Use of the International Phonetic Alphabet*. Cambridge University Press.